石碑にみる桜島大正噴火の災害伝承

鹿児島大学名誉教授
岩松 暉

１．はじめに

明 2014 年 1 月 12 日は、わが国が 20 世紀に経験した最大の火山災害「桜島大正噴火」のちょうど 100 周年である。1914 年当時は大正デモクラシーの真最中、第一次世界大戦勃発の直前であった。マスコミも発達し、地方紙も隆盛を極めていたし、写真機も上流人士には普及し始めていた（写真-1）。明治時代の磐

写真-1　大隅半島と接続する寸前の桜島
（宮原景豊垂水郵便局長撮影）

梯山噴火に比し、記録が大量に残されていると考えられがちであるが、鹿児島には海軍基地があったためか、第二次世界大戦時の空襲により、徹底的に焼き尽くされ、地元には資料がほとんど残っていない。大隅半島など空襲を免れたところも、鹿児島県に公立公文書館がないためもあって、市町村合併の度に貴重な資料が廃棄され、やはりほとんど残っていない。

100 年も経つと、災害を直接経験した人たちの孫・曽孫の世代であり、ほとんど伝承されていない。したがって、桜島大正噴火というと、観光資源としての大正溶岩と埋没鳥居しか思い浮かばず、あれは島内の話、と人ごととして捉えられているのが実情である。

しかし、学術の世界では震災予防調査会が有効に機能していたから、大森房吉・小藤文次郎・佐藤傳蔵らの詳細な論文が残されているし（写真-2）、測候所も記録を残している。

写真-2　小藤文次郎東京帝国大学教授のフィールドノート

２．災害伝承としての記念碑

災害の記念碑に関しては寺田寅彦（1933）が『津浪と人間』で名言を吐いている。すなわち、「**災害記念碑を立てて永久的警告を残してはどうかという説もあるであろう。しかし、はじめは人目に付きやすい処に立ててあるのが、道路改修、市区改正等の行われる度にあちらこちらと移されて、おしまいにはどこの山蔭の竹藪の中に埋もれないとも限らない。…（中略）…そうしてその碑石が八重葎（やえむぐら）に埋もれた頃に、時分はよしと次の津浪がそろそろ準備されるであろう**」と。実際、筆者が直接見聞した例を挙げると、大船渡市三陸町越喜来（おきらい）に東京朝日新聞社が寄贈した昭和三陸津波の記念碑がある（写真-3）「**長く大きくゆれる地震は／津浪の警報と心得／直ちに近くの高地へ避け／一時間位はその場を離れるな**」と適確に書かれているが、3. 11 の大津波で洗い出されるまでは藪の中で、多くの人はその存在を知らなかったらしい。

桜島大正噴火の記念碑も同様である。三陸海岸のような中・古生層の硬い岩石が産出す

写真-3　大船渡市崎浜の大船渡市三陸町越喜来記念碑（左）と鹿屋市旧岳野小学校の桜島大正噴火記念碑（右）

るところと違って、鹿児島は軟質で空隙に富む溶結凝灰岩が使われているから、風化しやすい上に、苔が生え、蔦が絡まって、文字さえ判読しにくい（写真-3）。寺田の指摘通り、邪魔にされてあちこち移転させられ、地元の教育委員会に聞いても所在さえわからないことが多々あった。

３．桜島大正噴火関係記念碑

内閣府中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会の依頼で「1914 桜島噴火」報告書取りまとめの主査を務めた際、上述のように一次資料がほとんどなかったので、やむなく記念碑について調べてみた。最初は爆発記念碑のような直裁的なものを対象にしていたが、耕地整理記念碑のような一見、火山災害とは無関係と思われるようなものにも、噴火の記載があることがわかり、対象を広げることにしたところ、70 基近く発見された（図-1）。中には郷土誌に碑文まで記載されているのに、未だに見つからないものもある。

内容は大別すると次の 4 つであり、分布に特徴がある。

①噴火や地震の経緯と教訓をまとめたもの。桜島島内と鹿児島市周辺に多い。

②降灰被害に伴う耕地整理や、土石流・洪水に伴う河川改修に関するもの。大隅半島、と

図-1　桜島大正噴火記念碑分布図

くに串良川沿岸に多い。

③地盤沈下と高潮による塩田や干拓地の沈水と護岸決壊に関するもの。鹿児島湾奥部に多い。

④移住の苦労と開拓魂を伝えようとするもの。宮崎県小林市から種子島までの移住者集落にある。

４．“科学不信”の碑

上記、4 つのカテゴリーを解説する前に、学者の間では一番有名ないわゆる“科学不信”の碑（写真-4）を紹介しよう。噴火 10 周年の 1924 年に東桜島村（村長野添八百蔵氏）が建立した。

「(前略)刻刻容易ナラサル現象ナリシヲ以テ村長ハ数回測候所ニ判定ヲ求メシモ櫻島ニハ噴火ナシト答フ故ニ村長ハ殘留ノ住民ニ狼狽シテ避難スルニ及ハスト諭達セシカ間モナク大爆發シテ測候所ヲ信頼セシ知識階級ノ人却テ災禍ニ罹リ村長一行ハ難ヲ避クル地ナク各身ヲ以テ海ニ投シ漂流中山下収入役大山書記ノ如キハ終ニ悲惨ナル殉職ノ最期ヲ遂クルニ至レリ（後略)」と経緯が書かれてい

写真-4　科学不信の碑（東桜島小学校）

る。「**地震頻發**」「**熱湯湧沸**」など前兆現象があったため、安永噴火の伝承や生き物としての本能に基づいて住民はいち早く避難したが、科学を信じた知識階級は逃げ遅れ、犠牲者を出してしまった。当時、桜島は休火山と言われていたから、そうした知識も災いしたらしい。測候所には旧式のミルン式地震計1台しかなく、地震火山の専門家もいなかったし、活発な活動を続けていた霧島山に気を取られていたことも誤判の原因だったようだ。10年後記念碑建立に当たって、村議会では「測候所の判断に決して従うことなく、急いで避難せよ」との文を入れることで一致していたが、村長が鹿児島新聞の牧暁村記者に起草を依頼したところ、下記のように「**理論ニ信頼セス**」と婉曲な表現に変わっていた。以下、後略の部分である。

「**本島ノ爆發ハ古來歴史ニ照シ後日復亦免レサルハ必然ノコトナルヘシ住民ハ理論ニ信頼セス異變ヲ認知スル時ハ未前ニ避難ノ用意尤モ肝要トシ平素勤倹産ヲ治メ何時變災ニ値モ路途ニ迷ハサル覺悟ナカルヘカラス茲ニ碑ヲ建テ以テ記念トス**」

ここで重要なことが述べられている。桜島にとって噴火災害は今後とも不可避だから、前兆現象があったら直ちに避難すること、被災に備えて勤倹貯蓄・殖産興業に励めということである。前段の爆発必然に関しては、現在に至るまで爆発記念日の1月12日に総合防災訓練が毎年大々的に行われている。後段の殖産興業に関しては、後述の久米西桜島村長の実践が挙げられる。

５．噴火の経緯と教訓を記した記念碑

(1) 全貌がわかるもの

桜島大正噴火の全貌を適確に記したのは、1916年鹿児島市が建てたもので、現在鹿児島県立博物館横にある（**写真-5**）。東京帝国大学今村明恒助教授の草案になり、前兆現象（地震・温泉湧出）、噴火概況と地形変化・被害、地震の状況と被害、毒ガス・津波のデマ、当局と軍の活躍、地盤沈下、皇室からの救恤金下賜など全般を詳述し、最後に「**安永天明ノ噴火ニ比スルニ現象大差ナキニ似タリサレバ専門ノ學者豫メ櫻島ノ狀態ヲ講究シ有識ノ父老舊記ニ徵シテ變兆ニ鑑ミナバ今次ノ災異恐ラクハ豫知セラレ禍害亦幾分ノ輕減ヲ見シナラン**」と暗に測候所の不手際を批判し、「**蓋百年ノ後又此ノ如キ爆破ナキヲ**

写真-5　県立博物館横の記念碑

保セズ爲ニ概況ヲ記シテ不朽ニ傳フ庶幾クハ今回罹災ノ不幸ヲ弔シ併テ後世永ク追憶シ以テ未來ノ慘禍ヲ軽減スルノ資タラシメンコトヲ」と結んでいる。今がちょうどその百年である。

(2) 桜島島内の様子

桜島島内の様子を詳細に伝えているのは、桜峰小学校にある長文のもので第七高等学校教授山田準の撰になる。前述の“科学不信”の碑より早い 1919 年に西桜島村(村長大窪宗輔氏）が建立したものである。主要部分を抜粋すると、「**前日（中略）實ニ四百十八回ノ震動ヲ数フ人心爲メニ恟々タリ**」「**巨石ヲ飛ハシ轟鳴次第ニ加ハリ火光放射ス**」「**老幼提携身ヲ輕舸ニ寄セテ難ヲ避ク**」「**多数救護船来集シ島民悉ク難ヲ避ク**」「**薄暮俄然大震動殺到ス**」「**熔岩四方ニ噴騰シ火粉全島ヲ掩ヒ西海岸ノ民家一齊ニ炎上ス**」「**家畜悉ク焼死シ灰沙田野ヲ埋ムルコト数尺又ハ数丈**」「**噴火漸々収マルト共ニ經濟難來ル**」「**移住地ヲ種子島其他数所ニ定メテ窮民ヲ分附ス**」などとある。島内の悲惨な様子・混乱がよく分かる。また、島内にとどまっていた「**島民悉ク難ヲ避ク**」とあるのは、安山岩溶岩流の流速が遅いためである。田野を埋めた降灰からの復旧については後述する。記念碑は最後に「**安永ヲ去ルコト百三十餘年ニシテ今次ノ爆発アリ往々因テ来ヲ察セハ今後ノ事知リ難カラス後人能ク萬一ヲ無虞ノ日ニ警メ安キニ狃レス變ニ騒カス以テ先人ノ憂勞ニ答フル所アランカ**」と結んでいる。すなわち、桜島は何時爆発があるかも判らないので、後人は万一のことを考え災害を忘れることなく安易に日々を送らず、常に備えることが先人の苦難に応えるものだと戒めているのである。

(3) 地縁社会の救援

島民達は四方の市町村に避難したが、そこも夕刻発生した地震の被害と津波・毒ガス襲来のデマで混乱していた。しかし、青年会・婦人会・在郷軍人会など地縁組織が健在だったから、率先して支援に当たった。姶良市の柁城小学校にはその間の事情を物語る記念碑が残されている（写真-6)。「**櫻島避難者ハ續々来リテ一千余人ニ及ヒタレバ町吏ハ救助ニ忙殺セラレ常務ヲ處理スル能ハス**」「**臨時救護團ヲ組織シ精矛神社ノ社務所ニ置キ**」「**田中川原ニ避難小屋ヲ作リ之ニ移轉セシメ**」「**救護費ノ如キハ縣費ト當町特志家ノ寄附トヲ以テ支辨シ**」などとある。篤志家の施行があったことも分かる。寄付をしたのは一部富豪だけではない。鹿児島市中山尋常小学校の作文帖を読むと、住民達はそれぞれ、避難民を泊めたり、カライモ（甘藷)・米・味噌・大根などの食料や薪などを寄付したりしているし、学童も学校を通じて 5 銭寄付したと書いてある。

６．地震動災害（震災）の記念碑

噴火当日の 18 時 29 分 M7.1 の直下型地震が発生、対岸の鹿児島市周辺で家屋や石塀の倒壊、シラス崖の崩壊などで 29 名の犠牲者を出している。とくに江戸時代の埋立地や川沿

写真-6　姶良市立柁城小学校の記念碑

いの軟弱地盤で震度が高く、液状化も発生している（図-2）。天を覆う黒煙と轟音の中に激震である。人々は恐怖のまっただ中にたたき込まれた。津波や毒ガス襲来のデマも、そうした不安の中で受け入れられ、一時市内は無人になったという。郊外への避難路に当たっていた鹿児島市肥田（ひだ）には青年会と消防組の建てた記念碑がある（写真-7）。「**大正三年一月十一日午前三時四十一分無感覺（かんかく）ノ微震アリ爾後（じご）地震頻繁**」「**同日（注：12 日）午後六時三十分烈震アリ爲ニ住民 悉（ことごと）ク畑又ハ田中ニ露宿セリ**」「**同十四日ニ至リ稍衰褪（ややすいたい）セリ**」などと経過を記載した後、「**爾后萬一（じごまんいち）ノ変災ニ際シテハ狼狽遠ク避難スルノ要ナカラン**」と結んでいる。同様な記念碑は鹿児島市郡山町常磐にもある。「**数千ノ避難民市ヲ成シ各々青年會（かい）員其他ニ於テ救ゴノ方法ヲトレリ又本村民ニシテ入來樋脇（いりきひわき）方面ヘ避難セシ者多数アリタレ共當村（とうそん）ニハ何ノ危険モナカリキ**」と付和雷同を戒めている。

７．降灰被害・水害の記念碑

前述したように大正溶岩はあまりにも有名だが、実は軽石・火山灰の降灰被害も甚大だった。季節は冬、折からの西風に乗って大隅半島方面に大量に積もった（図-3）。その有様

写真-7　鹿児島市肥田の記念碑

を鹿屋市観音淵の堤塘（ていとう）工事記念碑は次のように述べている。「**櫻嶋爆發（さくらじまばくはつ）シ降流灰砂殆ド四尺ニ及ヒ河水濁流シ為メニ魚族全滅シタリ殊ニ爆發后（ご）ノ大洪水ハ未曽有ノ大氾濫ヲナシ堤塘ヲ決潰（けっかい）シテ土砂ヲ流シ以テ沿岸ノ耕地ヲシテ一望荒涼タル砂漠ト化セシメタリ**」とある。したがって、農地復旧・耕地整理、堤防復旧・河川改修は急務だった。とくに、大量の軽石・火山灰が堆積していた高隈（たかくま）山系を源流とする串良川の被害がひどく、降雨の度に土石流が発生、修復しては壊される賽（さい）の河原の繰り返しだった。沿岸に 11 基も記念碑がある。

また、まだ土木学会も生まれていない時代だから素人工法で行わざるを得なかったし、当然、重機もなかったから住民総出の労働奉仕に頼らざるを得なかった。たとえば、鹿屋市高隈中央では、同じ場所に河川改修記念碑と第二回河川記念碑と 2 つある（写真-8）。

図-2　鹿児島市内の震度（今村, 1920）

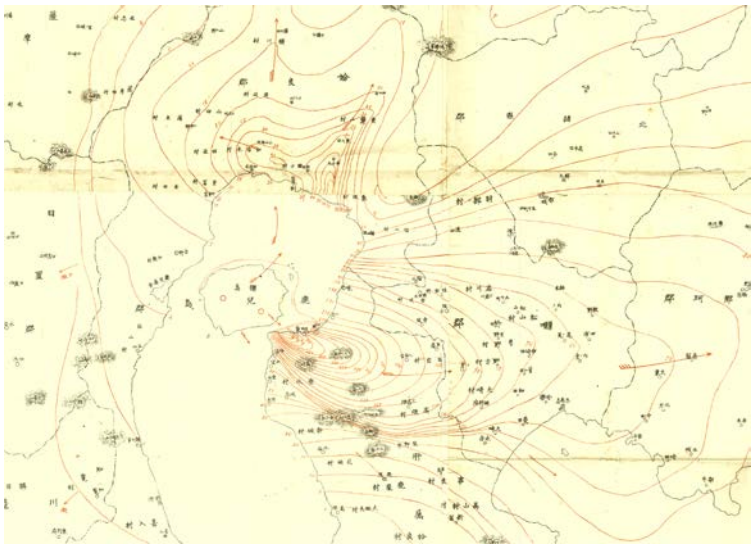

図-3　櫻島火山降灰礫分布圖（金井,1920）「単位：尺」

覆った火山灰や軽石を除き更に1m余りの穴を掘って火山灰や軽石を入れ、その上にもとの黒土を被せるのである。費用には政府からの無利息借入金や県費、義援金などが当てられた。噴火から11年、大窪村長が病気で倒れるほど苦心惨憺のすえ工事が完成、「**村民漸ヤク其ノ堵ニ安ンジテ生業ニ從事シ得ルニ至レリ**」として、記念碑が建立された。

前者には「**下古園青年運搬寄附**」とあるが、後者には「**運搬寄附　高隈小學校兒童**」とあり、最後には学童まで駆り出されたらしい。

もちろん、大隅半島だけでなく桜島島内はもっと降灰量が多かったから、それだけ農地復旧は大変だった。桜島武町南方神社にある櫻嶋爆發土地復舊工事紀念碑には、その苦労がつぶさに記されている。「**全島噴石輕石降灰ヲ以テ埋メラレ其ノ厚サ四五尺ヨリ數丈ニ達ス**」「**歸村シタル罹災村民ハ食フニ食ナク住ムニ家ナク耕スニ一片ノ土地アルナシ實ニ當時村民ノ窮乏ノ悲惨ノ狀況ハ能ク筆舌ノ盡ス所にアラサリキ災害土地ノ復舊耕地ノ回復整理ハ最トモ緊急ヲ要スル事ニ属セリ**」とあり、12月に西櫻島村耕地整理組合を結成、大窪村長が組合長に就任した。復旧は主に「天地返し」で行われた。1m以上も

写真-8　鹿屋市高隈の河川改修記念碑

８．地盤沈下・高潮の記念碑

桜島大正噴火で忘れられがちなのが地盤沈下災害である。桜島マグマの供給源は姶良カルデラ中央部にあるから、カルデラの位置する鹿児島湾奥部では数 10cmも沈下した（図-4）。そのため、塩田や江戸時代の干拓地は水没した。まさに滄桑の変である。姶良市・霧島市の海岸部に7基も記念碑が存在する。

(1) 霧島市小村新田の水没

小村新田は江戸時代末期の干拓地である。霧島市大穴持神社には記念碑が2つ並んで建っている。1916年に建てられた堤防復舊記念碑には「**沿岸一帶ノ土地沈降海水ハ三尺餘ノ高潮口來シ地區内ニ海水侵入水田ノ大半ハ一大沼海ト變ズルニ至リ…八月ノ高潮…激甚ヲ加…遠近ノ應援團ト共ニ日夜寝食ヲ忘レ大ニ防禦ニ努メタル甲斐アラバコソ仝月二十五日堤防ノ西南角其他数ヶ所ニ大決潰ヲ生ジ海水滔々トシテ浸入青田変ジテ海ト成リ浸水家屋百餘戸家財流失着ルニ衣ナク食フニ食ナキノ惨状ヲ呈シ村民ノ困憊其極ニ達セリ**」と惨状が記されている。桜島噴火に伴う地盤沈下に8月の高潮が追い打ちをかけたのだ。

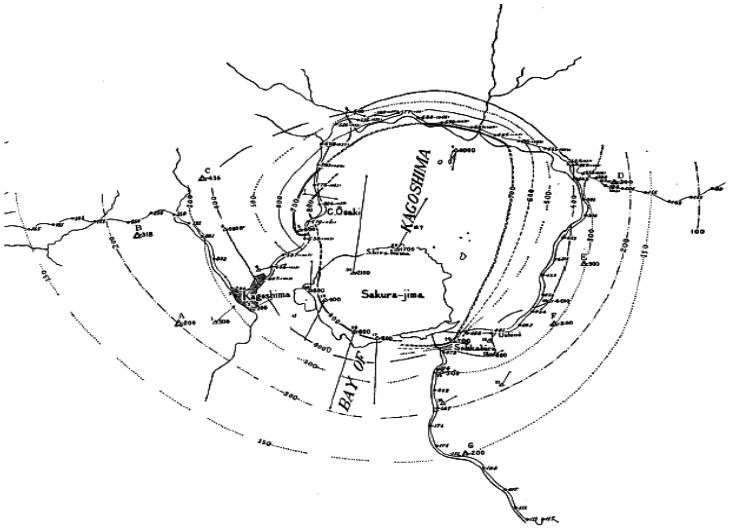

図-4　姶良カルデラの地盤沈下（Koto, 1916）

（2）帖佐松原塩田の水没

姶良カルデラの中では姶良市・霧島市の海岸は遠浅のため、古くから塩田が営まれていた。それが地盤沈下のため水没したのである。

堤防決壊とあるから、地盤沈下だけでなく、恐らく地震に伴う液状化や側方流動などもあったのであろう。古くは1931年の塩田嵩揚（かさあげ）工事記念碑もあるが、氏名だけで碑文がないので、1968年の塩田の碑を紹介する（**写真-9**）。

写真-9　姶良市塩釜公園の塩田の碑

明治初年以来の歴史を述べた後「**大正三年桜島爆発の際大津波が襲い堤防は忽ち決壊し塩田は一面の海となり復旧の術もなかった。**」と記されている。近くの塩釜神社の鳥居が嵩揚げにより寸足らずになっているから、多少の津波はあったかも知れないが、大部分は地盤沈下によるものであろう。碑文には続いて、中村村長による復旧計画立案と阻止運動、引責辞任、後任蓑毛（みのも）村長の復旧工事実行などの経過が記され、1940年代には一大製塩場に発展、「**県下で一番税金の安い村と言われるまでに**」なったとある。

その後、1951年のルース台風で壊滅的な被害を受け塩田は閉鎖された。

９．移住記念碑

地震災害なら、地震保険に入っていれば住宅再建は可能である。しかし、火山災害は家屋だけでなく土地まで失うことがある。溶岩で埋まったところや、分厚い軽石・火山灰で覆われたところは、移住するしか方法がない。島内だけでなく百引（もびき）村（現鹿屋市）など大隅半島からも移住者が出た。溶岩流出を目撃した県当局は移住不可避とみて、噴火後5日目には、熊毛郡長宛に移住の打診をしているし、北海道など各地に吏員を派遣移住候補地の調査をさせている。国も6月には勅令で主務大臣（内務・大蔵・文部）の権限を県知事に委任、現状に即した機敏な措置が執れるようにした。移住には指定移住地と縁故をたどる任意移住地とがあった。指定移住地は国有林を県に無償で払い下げ、県はこれを罹災者に貸与、開墾が完了して一定の年数が経過したら、無償譲渡する仕組みだった。移住民には移住費・農機具・種苗費・小屋掛け費・家具費・

食料費などが支給された。貸与されたのは農地だけでなく、宅地・薪炭林地・学校敷地・墓地・寺院敷地などさまざまな種目がある。3月 12 日には種子島に移住が開始され、また、垂水村大野原では翌年中に入植が完了している。このように敏速な措置が執られたが、国有林の原野を開墾するのは困難を極めた上、飲料水の入手に苦労した。谷底に水を汲みに行くのは女子供の日課、重労働だった。桜原の櫻島爆發移住記念碑には、側面に「**水道記念**」と刻まれている（**写真-10**）。水道開通がどれほど待たれていたかがわかる。

移住記念碑には移住者の氏名を列記したものが多く、碑文が少ないが、宮崎県小林市大王の移住紀念碑にはかなり長い碑文がある。「**一萬住民歸るに家無く耕に地無く太凄惨を極む識者奔走復旧を策するも事固より容易ならず仍而意を決して遂に宮崎縣西諸縣郡小林町字大王の地に移る累世墳墓の土を辭してあえて未蹈の地に漂浪す誰か亦涙なきを得んや**」と心境が綴られている。噴火の 4 ヶ月後 5 月 6 日に入植、1917 年には水道完成、1923 年に「**生計の基礎漸定り各其堵に安ず**」と記念碑を建立した。

写真-10　錦江町桜原の移住記念碑

当初貸与されていた土地が無償譲渡され、土地所有権が各自の手に移った喜びを記念する土地所有權移轉紀念碑が垂水市大野原にある。記念碑建立の日付は 1936 年である。移住 21 年後のことであった。

１０．開拓魂を伝える石碑

指定移住地は国有林の原野だったから、子供たちは険しい山道を遠くまで通学しなければならなかった。それも不可能なところには尋常小学校が新設された。大野原（現垂水市）、大中尾（現南大隅町）、鴻峰（現西之表市）の 3 尋常小学校である。これら移住地は父祖の言語を絶する苦労にも関わらず過疎高齢化が進行、いずれも現在休校中、実質的には廃校である。大野原小中学校には、祖先の開拓魂を伝えようと、正面に「開拓魂」という石碑が建っている（**写真-11**）。しかし、今は賑やかな子等の声が聞こえない。

写真-11　旧大野小中学校「開拓魂」

１１．復興に関した頌徳碑

前述したように、櫻嶋爆發土地復舊工事紀念碑の大窪村長、塩田の碑の蓑毛村長など記念碑の中に功績が称えられているものもあるが、復興の中心となった人物の頌徳碑もある。

東桜島小学校の爆發記念碑にある「**勤倹産**

ヲ治メ」を実行したのが西桜島村長久米芳季(よしすえ)翁である（写真-12）。翁は、「**大正十二年村農会長に就任するや鹿兒島市小川町に青果市場を創設して販路の拡張品種の改良に又産業組合の振興に寝食を忘れて奔走し村経済発展の基礎を確立し昭和四年村長に推されるや村営交通事業を開始して子弟の勉学に資し村民の村外発展の礎を樹てると共に噴火の災害に備える基本財産造成に着手した**」。大正末期までは、島民丹精の農産物が鹿児島の問屋に安く買いたたかれていたため、対抗策として対岸の鹿児島市内に青果市場を設置したり、村営バスや村営フェリー事業を興したりした。これが基礎となり、桜島大根や桜島小ミカンなどの特産品と観光事業で、昭和 40 年代からの新婚旅行ブームと相まって、村民税ゼロと言われる豊かな村を築き上げた。そのため、鹿児島市との合併をかたくなに拒み続け、ようやく合併したのは平成の大合併のときであった。翁の頌徳碑は翁の生前 1958 年桜島港に建立された。

島外でも降灰被害から立ち直るために耕地整理が喫緊の課題だった。耕地整理は水利権や土地の地味など、複雑に利害が絡んで難しい。私財を投じて完成したのが山重太吉翁である。1966 年翁の 33 回忌に当たり、曽於市荒谷(あらたに)の美田を見下ろす地に頌徳碑が建てられた。「**然し乍(なが)ら翌三年桜島の大噴火があり降灰四十センチに及んで川の模様は一変大正六年同十年と用水路に水は溢れ埋って工事は挫折し予算は次々に狂った大正十三年その工事資金五万六千六百八十五円の返済要求を受け水田五町畑十五町山林三十有余町歩を競売さる当時米一升十五銭の時代にて翁の私有財産ことごとくを開田に費消されたものである**」とその間の事情が記されている。

写真-12　久米翁頌徳碑とスクリュー・錨

１２．おわりに

火山災害は地震災害と違って一過性ではない。長期にわたる同時多発広域複合災害なのが特徴である。桜島大正噴火でも、直接の噴火災害だけでなく、地震災害・地盤沈下災害・土砂災害・水害など多種多様な災害があった。

記念碑には記されていないが、避難中の不衛生な環境や汚れた水などが原因で赤痢・腸チフスなど伝染病も蔓延、火山活動や地震に伴う直接の犠牲者よりも多い方々が亡くなっている。

近年の火山災害を例に取ると、1990 年雲仙普賢岳噴火では 1995 年まで活動が継続したし、2000 年三宅島噴火でも、2005 年避難指示は解除されたものの、未だに火山ガスの放出が続いている。桜島大正噴火の噴火活動は 1 年近く続いたが、火山活動の終息宣言は決して災害終了ではない。世間一般からは災害終了として、忘れ去られていくだろうが、地元ではここから地獄が始まるのである。噴火活動の最中は周囲からの同情とあつい支援があり、被災者同士も貧富・身分の差を超え、互いに助け合う。いわゆる災害ユートピアの実現である。

しかし、生活再建の段階になると、被災の程度、貧富の格差、世代間・地域間の思惑の違いなどが表面化し、利害が錯綜して、復興方法のあり方、将来像などをめぐって軋轢が

生じる。一般には記念碑にマイナス面を記すことは稀であるが、数ある記念碑の中にはそれをうかがわせる碑文もあるし、中には文章が途中で突然途切れているものもある。小学校に残された PTA の記録には「政治闘争」「肉親離反」などの文言があり、その間の事情を物語っているようだ。

こうした対立を乗り越え、皆を団結させて、復興を果たしていくには、強いリーダーの存在が不可欠となる。桜島大正噴火時で言えば、各地で名村長が活躍した。こうして「県下で一番税金の安い村」「村民税ゼロの村」が実現されたのである。被災前より豊かに復興して、始めて災害が終了したと言えるのではないだろうか。それには 10 年から数 10 年かかる。

被災地域以外の人たちには、現地ではこのような葛藤と苦闘が続いていることを認識し、長期にわたる暖かい継続的な支援が求められる。

さて、冒頭述べたように、近々桜島大正噴火 100 周年を迎える。これは単なる節目ではない。2011 年の東北地方太平洋沖地震で日本列島の応力場が変化し、大地震や大噴火が発生しやすい地学的な環境が醸成されている。南海トラフの連動型地震や富士山噴火などが取り沙汰されている所以である。南九州も例外ではないのである。そこで、鹿児島大学地域防災教育研究センターと南日本新聞と共同で、姶良カルデラ周辺の約 200 事業所を対象に、アンケート調査を行った。事業継続計画（BCP）を有し、実践しているところはごく僅かであった。大正クラスの大噴火があるかも知れないとは認識しているが、わが事として受け止めていないのである。「想定外」を想定しようとの意欲、あるいは勇気に欠けているようだ。長期の休業は顧客の離反、雇用の喪失、地域の衰退へ直結する。桜峰小学校の記念碑に「**萬一ヲ無虞ノ日ニ警メ安キニ狃レス變ニ騒カス**」とあったが、「安きに慣れて」いるのではなかろうか。今の「無虞の日」こそ、大正噴火の経験を生かし、想定外に備えて準備をする絶好の機会である。

引用文献

今村明恒（1920）、 震災豫防調査會報告 92 號.
金井眞澄（1920）、 鹿兒島高等農林學校調査報文.
Koto, B. (1916), Jour. Coll. Sci., Tokyo Imperial Univ., Vol. 38, Art. 3.
寺田寅彦（1933）, 寺田寅彦全集 7 巻.